

## 成績はビリだったチャーチル

——ヒットラーの侵攻を前に訴える——

「私には血と労働と涙それに汗——これ以外に提供できるものは何もない」

イギリスのウィンストン・チャーチルについてのエピソードはこと欠かない。

幼年時代に寄宿学校に入れられ厳格な教育を受けた。生来は左利きだったが右利きになることを強要され、後遺症に苦しめられる。成績はビリから三番目、彼より下位の二人は病気などの理由で退学した。あまりの成績の悪さに、ギリシア語、ラテン語は身につかないだろうということで、特別補修のクラスで教師から英語の構文を徹底的に教えられた。学校時代の成績は終始ふるわなかったが、フェンシングは大会で優勝するほどの腕前であった。サンドハースト王立陸軍士官学校を3度受験してようやく合格。

やがて下院議員に当選、首相となってドイツのヒットラーのイギリス侵攻を前にした演説は国民を鼓舞し自信を与えるものとなった。

小学校、中学校の成績がふるわない世界中の子供、そして親や教師にとっても、子供たちを激励する最高のモデルともなるだろう。

首相に就任したチャーチルは言葉を武器として戦った。それは組閣して3日後の国会で顕現された。その演説は決意がほとぼしる忘れがたいものだった。それは各方面に電撃的に波及していった。



時はまさにヒットラーがダンケルク（フランス北部の港市）まで前進、さらにイギリスへの侵攻しようとする直前だった。戦争の最も危機的な段階と脅威にあったとき、“降伏など絶対にしない”という、ブルドッグ精神にも似たチャーチルのスピーチは英国全土に浸透していったのである。

以下は前月と同じく「Speeches——The Penguin Book of Twentieth Century」からの引用である。（翻訳：筆者）

### 1940年5月13日 ロンドンにて

まず、我々は今歴史に残る戦いの準備段階にあることを認識しなければならない。我々はノルウェイやオランダの多くの場所で動いている。地中海で態勢を整え、空中戦は続いておりこちらでも徹底した準備がなされなければならない。この危機の段階において、私は議会に詳細を報告しなくてもよいことを認めていただきたいと思います。友人も、同僚も、政変のために影響を受けた以前の同僚も、必要とされるセレモニーや手続きが足りなくても許容していただきたいと思います。

私は政権に加わった人々にやってきたように議会で訴えた。

「私には血と労働と涙それに汗——これ以外に提供できるものは何もない」

我々の前には耐えがたい厳しい試練が待っている。我々の前には多くの、何カ月もの苦しみと闘争が待っている。



ヤルタ会談にて——左からチャーチル、ルーズベルト、スターリン

国民は尋ねる。「我々の方針は？」。私は訴える。「それは戦争を遂行することだ。海から、陸から、空から、神の最大の加護のもと最大の力で臨むことだ。化け物の暴虐者に対抗し、人類の罪なる嘆くべき連鎖に暗闇の中でも負けない。それが我々の方針なのだ。

国民は尋ねる。「我々の目的は何か？」。私は一言で返答する。「勝つこと。何がなんでも勝利することである。あらゆる恐怖を乗り越えての勝利である。それがどんなに長く厳しい道であろうとも。なぜなら勝利なくしては我々が生きながらえることはないからだ。

これを実現しよう。イギリス帝国のサバイバルではない。時代の衝動や刺激によるサバイバルではなく、これは人類が向かうゴールなのである。私はおのが課題に元気さと希望を持って取り組む。私は、我々の進めていることが人類の中で失敗して苦しむことになるとは思わない。現時点で私は国民の支援を要求する資格を与えられていると思う。そこで訴えたい。「さあ立ち上がろう。共に我々の団結力で前進しようではないか！」

——なんと力強い呼びかけだろう。誰もが戦争には反対だ。でも、人類の悪が、敵が襲ってこようとしているときに立ち上がらねば、こちらがその暴虐に踏みつぶされてしまう。団結を呼びかけるチャーチルのスピーチに奮い立った国民の支えがあつて、イギリスはヒトラーの侵攻を防いだ。

国民に夢を語る、みんなの団結を訴える、そんな力強い指導者を日本でも渴望したいところだ。